



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ネパール農業の土地利用に関する調査研究：カトマンズ盆地における農家事例その2                                            |
| Author(s)        | 黒河, 功                                                                             |
| Citation         | 農業経営研究, 25, 235-240                                                               |
| Issue Date       | 1999-02                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/36538">https://hdl.handle.net/2115/36538</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 25_235-240.pdf                                                                    |



# ネパール農業の土地利用に関する調査研究

—カトマンズ盆地における農家事例その②—

黒河 功

1. ネパール農業の粗描
2. カトマンズ盆地における農民 —ネワール族の農村—
3. 継続調査対象地・サク村の農業

## 1. ネパール農業の粗描

ネパールの産業別就業人口分布において、農業・林業・漁業の就業割合はおよそ9割を占めている。ただし産業別就業といっても、農村あるいは小市街地区に住みながら半自給的な農業を営む、いわゆる生業として農業に就いているという表現の方がより正確である。いずれにしろ、ネパールにおいては農業はもっとも主要な産業であり、農業は国内総生産GDPのうちおよそ60%を占めている。

食糧の生産と消費の需給バランスは国内全体としてはとれているが、地域別の生産と消費のアンバランスおよび年次間の変動があり、食糧は10—15%ほど輸入している。また海外からの食料援助も、コメ、コムギ、トウモロコシ、コムギ粉などについて、年次によって多く受けてきている。世銀の「世界開発報告96」によると、1989—95年における5才以下の栄養失調蔓延率は70%とバングラデッシュに次いで高いものとなっている。

ネパールは開発地域ごとに地域区分をすると、東部、中部、西部、中西部、極西部と5地域に区分されているが、さらに海拔によって、世界の最高峰エベレストを含む山岳地域、標高500—2500メートルにある丘陵地域、標高60—300メートル前後の平原であるタライ地域に区分されている。それらは地形、気候、土壌、植生などの自然条件がそれぞれに異なり、したがって農業のあり方はそれぞれに多様となっている。

さて、ネパールの民族構成あるいはカースト集団は、多岐にわたり複雑であるが、ブラーマン、チェットリの民族が、両者併せてネパール人口のおよそ2分の1を占めている。彼らはインド・アーリヤ語系のヒンドゥ教徒（シ

ヴァ神、ヴィシュヌ神、ラマ神、クリシュナ神など多数の神様を礼拝する)である。その外に、中西部の山地斜面に住んできたゴルカ兵で有名なグルン族、およびそれと同種といわれているマガル、タカリーの少数民族が、併せておよそ3分の1を占める。その他、文化と宗教の起源をチベットにおくチベット・ビルマ語系の少数民族が多種存在するが、その代表的民族がシェルパ族であり、とくにネパール北部チベット国境となるヒマラヤ高地の谷や山腹に住んでいる。

このようにネパールの農業は、前述したように、多様な自然条件によるために、農業においてもきわめて多様な展開を示すのみならず、農業展開を担う主体である農民についても多様な民族に担われているのであり、さらに地域間における格差を拡大し複雑性をもたらししていると考えられる。したがって、このような狭い国土において地域間の自然的・社会的条件が著しく異なる場合、農業展開のあり方について一律には論じられないことは当然である。

現在まで、ネパール農業の中でもとくに生産力の向上が図りやすいとみられた地域は、標高を含めた気候条件や平地条件などに恵まれているタライ地域であり、実際にも技術的・経済的援助などが集中的に施され、一応の生産力向上も実現してきたといえる。

今後、問題とすべき対象地域は、これまであまり手が加えられることのなかった丘陵地域と山岳地域であるが、山岳地域は人口分布が希薄であることや自然条件があまりにも過酷であることから、開発順位からすれば、やはり丘陵地域ということになろう。とりあえず、丘陵地域における代表的な農業展開を示すひとつとみられるカトマンズ盆地の農業展開を、前稿に引き続き、みていくことにする。

## 2. カトマンズ盆地における農民 —ネワール族の農村—

全土の中で首都カトマンズ盆地において人口がもっとも多い民族はネワール族であり、国全体では5%を占めるにすぎないが、ネパールでもっとも古くから住み着いてきた土着民といわれている。ただし、ネワール族は他の民族のように種族としては単一民族ではなく、チベット・モンゴロイド系とインド・アーリア系(地中海型)の2系統から構成されている。しかしながら、歴史的に多くの他民族による影響を吸収しながら作りあげられたネワール文化の創始者という点では、両者が統一された民族といえる。宗教も前者の仏教と後者のヒンドゥ教の教義、行事、寺院までも両者併存したままで現在に

至っている。

したがって言語も、前者でのネワール語と後者のネパール語と2言語が使用されているが、ネワール族は交易・商売、手工芸や建築などにおいて独特の才能をもっており、とくに商人は全国の主要な都市に進出しており、そのためには共通語としてのネパール語は欠かせないものであったとも考えられる。

農業については、カトマンズ盆地以外の地域に各種職業をもって進出していったネワール族が兼業的農業を営むに対し、カトマンズを中心とする各盆地に住むネワール族はどちらかというと専門的な農業を営んでいる。大消費地である首都カトマンズを控えて、積極的な農産物市場対応が地方よりも展開可能であるためとみられる。

カトマンズ盆地での農業展開において、ヒンドゥ教のシヴァ神との関係で、カトマンズ盆地では雄牛を耕作の役には使わないという古くからの慣習があり、宗教的な事情によって農業展開が特徴づけられるという側面がみられる。もっとも近年においては、そのような慣習が昔ほどには規制力をもつものできなくなり、耕運作業に牛を使う風景もみられ、最近では耕耘機による作業も珍しくはなくなりつつある。

ネパールは、元来、種々多様な民族・慣習・宗教などをもつ多民族国家であるが、人口の半数以上を占めるヒンドゥ教徒であるブラマン、チェットリ族が、国家支配権を握ってきている。そのためヒンドゥ教におけるカースト制も、ヒンドゥ教の本場であるインドほどには厳密ではないといわれているが、しかし全体的な社会体制の基礎構造として色濃く存在している。農業に関しても、上位カーストは土地所有規模が相対的に大きい、水掛かりのよい上田を所有しているなど、制度による影響のあることが指摘されている。

### 3. 継続調査対象地・サク村の農業

首都カトマンズより20km、同じくカトマンズ盆地にあるサク村は、ネワール族の典型的な農村である。中心をサリナディ川が流れ、やや幅広の沢沿いに農地が傾斜面から平地に広がっている。標高は1200—1500mである。サリナディ川から分水させた幅1m程度の灌漑溝が走っているが、貯水施設を備えたものではなく、水量は自然降雨によるものである。したがって稲作は、年次の降雨次第あるいは灌漑水をうるることができる上田では年2回が可能であるが、基本的には雨期間の1作である。

サク村の代表的土地利用の形は、以下のとおりである。

- ① 馬鈴薯—コメ(タイシュン改良品種)—馬鈴薯(水が確保される場合)
- ② コメ(ローカルバラエティ種)—小麦(水が確保されない場合)
- ③ コメ—コメ(水が確保される場合)

①について、その時期を示すと、以下のとおりである。

(12月下旬) (4月下旬) (6月上旬) (9月中旬) (9月中旬) (11月中旬)

馬鈴薯作付—馬鈴薯堀取 コメ作付—コメ刈取 馬鈴薯作付—馬鈴薯堀取

②について、その時期を示すと、以下のとおりである。

(5月上旬) (6月上旬) (11月上旬) (11月中旬)

—小麦収穫 コメ作付—コメ刈取 小麦作付—

最初の稲作は雨期において作付けされるものであり、その後作の馬鈴薯作あるいは稲作は、水が確保される場合に作付けされるものである。確保できない場合には、小麦作か休耕地となる。水路がない場合には、雨期の開始状況によってコメ作付作業は遅くなる場合がしばしばある。あまり遅くなる場合には、6月中旬の植え付けに間に合わせるように、遠くから水を誘導してくる作業を行う場合もある。

このうち馬鈴薯作は商品化作目であり、農家の所得確保の重要な部門となっている。コメはおよそ10%程度は販売するが、残り90%程度は飯米として自給にまわされる。小麦はほとんど全部自給作目である。その外、ショウガ、タマネギ、ニンニク、トウモロコシ、および葉もの野菜などが作付けされている。ショウガ、葉もの野菜などの一部が販売されるが、基本的に自給部門といえる。このような野菜類は年2回程度収穫されるが、3年程度連作されることが多く、次第に収量が少なくなり、その場合に新しく播種し直されている。

乳牛(水牛)も1—2頭程度飼養されている農家が多くみられるが、多くは自家用であり、若干多頭飼育の場合には村内のお菓子屋さんなどに、生乳何リットルかを毎日小売りする。

全作業は基本的に手作業である。そのため雇用は頻繁に行われている。ほとんどが女性労働であり、仲介者がいて10人程度をとりまとめてくれる。広い面積の農家分が優先され、小規模の分は2—3日遅らせて調整している。また相互に作業時期がいくぶんづつ異なるので調整も可能にしている。非雇用者は、他民族であることもあり、その場合には酒を用意する。ブラーミン族の場合には家に現物をもっていく。

専業農家はやはり規模拡大の志向をもっており、経営面積の半分程度は借地であるというイメージである。そのような借地関係は、先祖伝来というものが多く、さらに一方で借地しながら他方で小作に出しているという場合も多くみられ、水利を含めた各圃場の性格、家族労働力の状態、兼業の状態、お金の貸借の状態など、さまざまな要素が錯綜しており、借地関係も短期的に流動している側面も強くもつ。

現金収入は、馬鈴薯販売 85%、コメ販売 12－13%、その他となっている。経営費のうちでは肥料費が 40－50%を占め、種苗費 25%、労賃 20%、農薬 5%、その他となっている。生活費は食費、衣料費、教育費などが主たるものであるが、意外にも、カトマンズとの交通費が多くかかっている。専業農家では輸送費、兼業農家では通勤費などと思われるが、年間の宗教行事がきわめて多いことにも関連しているものと考えられる。

## 参考文献

国際農林業協力協会『ネパールの農業—現状と開発の課題—』、海外農業開発調査研究国別研究シリーズNo47、1993

川喜多二郎監修・日本ネパール協会編『ネパールの集落』古今書院、1992

|       |        | 極西部     | 中西部     | 中部      | 西部      | 東部      | 全耕作面<br>積 | かんがい<br>栽培面積 | 天水栽培<br>面積ha | かんがい<br>可能面積 |
|-------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|--------------|--------------|--------------|
| 山岳地域  | 1000ha | 793     | 1,961   | 628     | 582     | 1,044   | 227       | 34           | 193          | 61           |
|       | %      | 41      | 46      | 23      | 20      | 37      | 9         |              |              |              |
| 丘陵地域  | 1000ha | 676     | 1,545   | 1,181   | 1,832   | 1,075   | 1,055     | 188          | 867          | 374          |
|       | %      | 35      | 37      | 38      | 62      | 38      | 40        |              |              |              |
| テライ地域 | 1000ha | 485     | 732     | 933     | 526     | 727     | 1,359     | 721          | 638          | 1,743        |
|       | %      | 25      | 17      | 34      | 18      | 26      | 51        |              |              |              |
| 全国    | 1000ha | 1,954   | 4,238   | 2,741   | 2,940   | 2,846   | 2,641     | 943          | 1,698        | 2,178        |
|       | %      | 13      | 29      | 19      | 20      | 19      | 100       | 100          | 100          | 100          |
| 農家数   |        | 179,239 | 276,705 | 706,419 | 453,331 | 578,262 |           |              |              |              |

土地なし農家を含む

資料:国際農村業協力協会「ネパールの農業」.